医学部 [一般・学士]～第２次試験～(1日目) 論文

試験時間	90分

注意事項　1　解答用紙に受験番号と氏名の記入を忘れないこと。
　　2　問題用紙、草稿用紙は解答用紙とともに机上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

科学技術の発展とともに医学の発展も止むことはない。病気の原因は分子・遺伝子のレベルで明らかにされ、新薬やロボット手術など医療には、患者がより早く、安全に健康を取り戻すように、さまざまな新技術が応用される。これらの技術を扱う医療者の教育には新しい知識と技能を教えることが必要であるが、現在の医療教育は裾野をもっと広げている。

二一世紀になり、「患者さんが満足する」ということも重要な治療の一つであることが認識されてきた。診断や治療について患者さんが自ら考え、決めていくというやり方が一般化した。社会が医師に求めることの第一は、必ずしも最先端の技術ではなく、自分の話を聞き、自分の考えを受け入れる姿勢である。医師が何も話さずに「はい、くすり」というような医療は行われなくなった。医師はじっくり話をして患者さんの希望を聞き、診断治療について詳しく説明を行い、患者さんが納得して医療を行うようになってきた。健康と病気に対して患者と医療者が逆の方向から相対していた時代から、同じ方向を向くようになってきたと言える。この変革に沿って「コミュニケーション力」は医療系の教育で重要な目標となってきた。

「患者サービス」、「介護サービス」など、医療関係用語に「サービス」という言葉が付くようになったのも最近の傾向である。サービスは「仕える」という意味をもち、医療がサービス化すると医療資源の使われ方も変わってくる。医師は患者さんが得心するように説明をしながら診療を行い、看護師は患者さんが気持ちよく治療を受けられるように気遣い、検査技師は検査の過程やそこで生じる不快感などを説明し、薬剤師は薬の飲み方や副作用について説明することが求められる。患者は普段とは異なる環境、心理、人間関係のなかで様々な不安を持って来院するので、そこで不安を和らげる気遣いを受けたり、十分な説明を受けたりすることは、医療を受ける者にとっては安心につながる好ましい動向である。患者が理解できるための「説明力」もまた医療教育の目標となった。説明するためには、「説明できる医療」が行われなくてはならない。そのため、「安全な医療」、「根拠に基づく医療」、「医療の透明性」なども教育の一部となってきた。

日常の診療でも、高度医療、終末期医療でも様々な医療者がひとりの患者に係わるようになってきた。医師・歯科医師・看護師・薬剤師だけでなく検査技師、介護士、作業療法士、社会福祉士など医療に係わる職種は多い。それぞれが関連し合い、重なり合いながら、それぞれの専門性が活かされること、「協働」が必要である。チーム医療という言葉が使われるようになったが、現実にはそれぞれ異なる背景で教育を受け、異なる専門力をもつ職種がサッカーやバレーボールのような「チーム」を構築するのは難しい。しかし患者中心医療を実践するためには、変化する患者とその周囲の環境に合わせたチームが必要で、これも教育目標の一つになっている。

一方で医師・看護師不足が顕在化している。喫緊の問題であれば、方策として医師・看護師を国外から輸入することが考えられる。二〇〇九年には国外からの看護師が日本で仕事をすることが話題になったが、医師輸入の論議はなされておらず、医学部の数・定員を増やすことが議論されている。しかし国外では医療者の国際間移動が当たり前になってきており、医学教育の質格差への国際的対応が始まっている。

［出典］吉岡俊正『医療人を育てる「医の未来」所収』

問一　この文章に、二十字以内で適切なタイトルをつけなさい。

問二　筆者が医療を行ううえで「チーム」が必要とする理由を、三百字以内で述べなさい。

問三　医療教育の目標として考えられることを、「コミュニケーション力」、「説明力」の二つのキーワードを入れ、具体的な事例をあげて六百字以内で述べなさい。